Ⅱ　南面大垣―朱雀門東―の調査（第130次）

調査地は第16次調査地区（朱雀門）の東、南面大垣および朱雀大路と二条大路の交点の地をふくむ。南面大垣については、第14・16・32・122次の計4次の発掘調査の結果、掘込地業による基底幅9尺の築地塀であると判明している。今回の調査は同地の南面大垣復原整備に先立つもので、遺構の残存状況の確認、大垣に関する詳しい資料の集積、朱雀門近傍の条坊遺構の確認を目的とした。

調査は北地区と南地区とに分けて行なった。北調査区は南面大垣の検出を目的とし、第16次調査区に一部重複させ、東西51ｍ、南北8ｍ、南調査区は条坊遺構の検出を目的とし、東西6ｍ、南北20ｍのトレンチを設定した。その後の拡張部分を含め、発掘総面積は約560㎡である。なお、南調査区は北調査区よりも現地表面が0.6～0.9ｍほど低い。

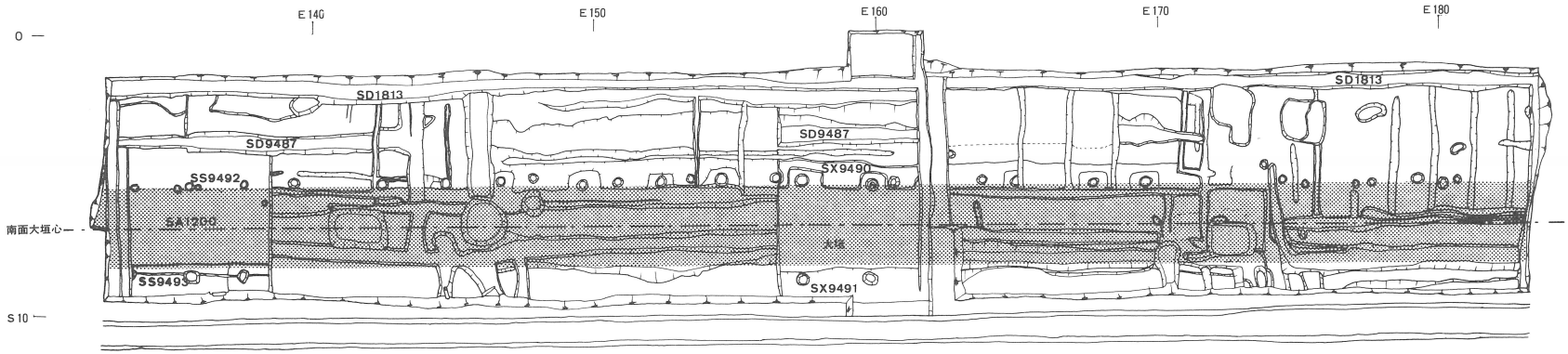
北調査区

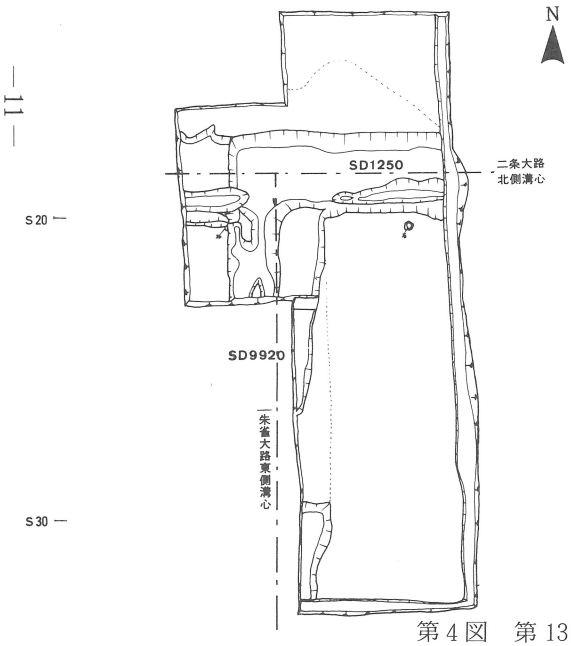
現地表下約60㎝、床土下が奈良時代の遺構面である。検出した奈良時代の遺構は、南面大垣・東西小柱穴列2条・東西掘込地業2条・東西溝2条である。

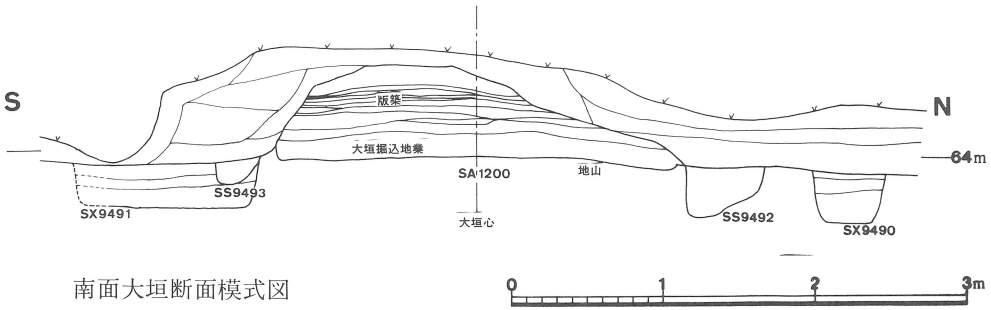
南面大垣ＳＡ1200は、削平が著しく基底部を残すにすぎない。地山（暗灰色粘質土）を幅9尺にわたって、浅く掘り込んで地業を行なっている。掘り込みの深さは10㎝弱で、掘り込みの底から最高25㎝の築土が残る。築土は粘質土と砂質土との互層で、各層の厚さは5㎝前後の粗い版築を行っている。

大垣の外側に接し、南北各1条の東西方向小柱穴列ＳＳ9492・9493がある。柱間は6尺～10尺と不揃いであるが、大垣を狭んだ南北の各柱穴位置は筋が揃っている。柱掘形は径40㎝前後と小さく柱抜取り痕跡も径15㎝ほどである。したがって、築地寄柱や掘立柱塀とは考え難く、大垣の版築の際に堰板を支えた添柱と考えられる。南北添柱の心々距離は約3.3ｍである。

添柱列とほぼ同位置に、東西方向の掘込地業ＳＸ9490・9491がある。大垣北側の掘込地業ＳＸ9490は、幅約1ｍ、深さ約20㎝で地山面から掘り込んでいる。版築は行なわず、黄褐色砂質土混りの暗灰色粘質土で埋めている。掘込地業ＳＸ9490







南面大垣断面模式図

第4図　第130次調査遺構図（断面模式図は第122・130次調査の所見を合成した）

と添柱列ＳＳ 9492との関係は場所によって異なる。発掘区中央部では、添柱を避けるように平面的に凹凸を設けて掘込地業を行なっているのに対して、西方部では掘込地業の埋土上面から添柱の掘形を掘り込んでいる。東方部は削平が著しく、掘込地業を検出できなかった。

大垣南側の掘込地業ＳＸ 9491は、ＳＸ 9490と同様に地山面から約20cm掘り込んでいる。南辺は現代の溝で破壊されている。地業の埋土は地山に似た暗灰色粘土で、ＳＸ 9490とは異なる。ＳＸ 9491は、発掘区西端と中央部とで確認したにすぎないが、いずれも添柱の掘形は掘込地業埋土上面から掘り込んでいる。

大垣心の北約 3.3 ｍの位置に東西溝ＳＤ 9487がある。 幅 0.4 ～ 0.8 ｍ、深さ 0.2 ～ 0.4 ｍで、地山面から掘り込む。埋土はＳＸ 9490の埋土に酷似し、出土遺物や水流の痕跡がないことから、比較的早い時期に廃絶したと考えられる。大垣北側雨落溝の可能性はあるが、溝の北肩の立ち上がりが緩勾配で、溝幅が一定しないことや、ＳＸ 9490と同様な埋め戻しをしている点なお検討が必要である。

以上述べた掘込地業ＳＸ 9490・9491、添柱列ＳＳ 9492・9493、東西溝ＳＤ 9487を覆って薄い整地層（黄褐色砂質土）がある。発掘区中央・西部に残り、厚いところで約10 cmをはかる。東部では削平されている。この整地層を切って、築地心の北約 5.1 ｍの位置に幅 0.6 ｍ、深さ 0.3 ｍの東西溝ＳＤ 1813がある。南面大垣の北を東西に走る宮内道路ＳＦ 1761の南側溝に相当し、同時に大垣から落ちる雨水の排水溝の役割を果す溝と考えられる。埋土上層から多量の瓦片が出土した。軒丸瓦17点、軒平瓦１点はいずれも藤原宮式である。

大垣の南では整地層（黄褐色砂質土）の上に厚さ約30cmの明黄褐色砂質土がある。この層は大垣築土残存部の上も覆っており、ほとんど遺物を含まない。南寄り部分では、南へ向ってやや低くなり、上面にバラスを敷き詰めている。このバラス面は、大垣改修に伴なう第２次の犬走り面と想定できるが、改修の時期を限定できる資料はない。明黄褐色砂質土層の上に厚さ約40cmの盛土（暗黄褐色土）があり、東西道路（現市道）となっている。この層にも藤原宮式軒瓦をはじめとする多量の瓦片を含むほか、中世以降の磁器片が混じる。

南調査区

南区では現地表下約60㎝の黄褐色砂質土上面で奈良時代の溝２条を検出した。

東西溝SD 1250 は幅 3.5 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m。南半部は一段深くなっていて 0.6 mをはかる。南面大垣との心々距離は約12 mで、二条大路の北側溝に相当し、第32・ 122 次調査の所見と一致する。

南北構SD 9920は、SD 1250 に取り付き幅 3.2 m、深さ 0.4 mをはかる。朱雀大路東側溝に相当し、朱雀門からの心々距離 37.7 m。大路幅は側溝心々で 75.4m と推算できる。昭和49年に奈良市が実施し、当研究所が協力した柏木町・六条町での調査結果72 m に比べてやや広いことになる。

SD1250・9920の堆積はおおむね 3層に分かれる。溝交点付近では最下層（暗灰色粘質土）から、木簡２点・人形３点・曲物１点が出土した。木簡は判読できない。そのほかに両溝から、平城宮瓦編年第Ⅰ・Ⅱ期に属する軒丸瓦４点、軒平瓦３点が出土した。

なお、SD 1250 の北側で、二条大路造営前の旧河川と考えられる灰色粗砂層を検出した。西北から東南にかけて斜行し、小量の自然木細片を含む。幅・深さ等は確認しなかった。北調査区ではこの旧河川の延長は検出されていない。

まとめ

北調査区、特に東半部では後世の削平が著しく、中世～現代にかけての土壙や溝によって奈良時代の遺構はかなり破壊されていた。しかし、従来の調査成果を再確認するとともに、掘込地業SX 9490 と添柱列SS 9492との前後関係 が場所によって異なることから、仕事上の手順が一様でないことが判明した。また、大垣の形式についても寄柱の有無が問題であったが、今回調査の結果からは、やはり寄柱を用いなかったと推定できた。さらに、大垣改修の可能性が生じてきたことは今後に大きな課題を残すことになった。

南調査区では、朱雀大路の側溝が二条大路の路面を突き抜けて二条大路北側溝に交わることを確認するとともに、平城京の条坊の起点とも言うべき地点の座標値を知るところとなり、条坊制解明の有力な資料を得た。